

代々語り継がれる歴史を次の時代へ 地域の誇り“七義士”の本を発刊

約270年前、三野郡笠岡村（現・豊中町笠田笠岡地区）の大西権兵衛など7人を中心とする「西讃百姓一揆」が起りました。命を投げ打ったその行動は時を越えて語り継がれ、平成が終わりを迎える今、1冊の本にまとめられました。



七義士を祀る豊中町笠田笠岡地区の七義士神社。ここには、大西権兵衛の辞世の句碑が建てられており、あの大平正芳元総理が外務大臣時代に書いた文字が刻まれています

七義士の遺徳を顕彰する会の皆さん

歴史的な大発見が本づくりのきっかけに

「七義士の勇敢な行為を、平成最後の区切りの時期に次の時代へ遺したい」

この想いで、本づくりへと動き出したのが「七義士の遺徳を顕彰する会」の皆さんです。実はこの本の発刊の背景には、きっかけとなる歴史的な大発見がありました。

平成27年、これまでずっと不明とされていた七義士



▶平成27年、一揆から265年もの時を越え、七義士の埋葬墓が発見されました。翌年には、笠田地区の皆さんが高松市下笠居の墓地を訪問



▲埋葬墓地の場所を発見し、本の資料集めを担当した石井利邦さん

の埋葬墓地が見つかったのです。場所は、現・高松市下笠居地区。七義士が処刑された金倉川処刑場（現・丸亀市金倉町）から密かに遺体は船で運ばれ、下笠居地区の人々によって、埋葬後から今まで大切に参り続けられてきたことが分かりました。*

また、これを機に笠田地区や文化財保護協会豊中支部の人々と高松市下笠居地区の人々との交流も始まり、毎年お互いに訪問し合う縁も生まれました。

埋葬墓地の場所を発見した当事者であり、本の製作に携わった石井利邦さんは、「下笠居で供養されていることが分かり、七義士の物

語は完結に至ったと感じました。貴重な資料が残っているうちに史実をまとめて、みんなに知ってほしいと思い、本づくりに取り掛かりました」と振り返ります。

本の完成は目標の一つ多くの人に読んでほしい

本は平成30年11月に完成し、「多くの人に広めるために」と、市内や七義士のゆかりの地にある学校、図書館、公民館などへ寄贈されました。

「権兵衛さんたちの志を後世に継承するのが私たちの役目です。本が完成したことで、一つの目標を達成できました」
七義士の遺徳を顕彰する



▲七義士の遺徳を顕彰する会会長の千秋直康さん

会会長の千秋直康さんは、「笠田地区だけでなく、関心のある人みんなに読んでもらいたいですね」とも言います。

大西権兵衛たち七義士の存在は、地域の人々にとって、まさに「ヒーロー」。6万5千人とも伝えられる農民を率いたリーダーシップ、そして、自分の命を犠牲にする大きな覚悟。その勇敢な生きざまが礎となっており、現在の私たちにつながっていると思うと、遺徳を語り継ぐ重要性を感じます。



▶本は1,000部発行し、約300部を無料配布。会のメンバーが集まって、袋詰め作業を行う際中には、「家庭に1冊置いてくれたらええなあ」という声が上がります

※当時、七義士の遺体を埋葬することは丸亀・多度津両藩に禁じられており、ようやく受け入れてくれたのが下笠居地区の人々でした

江戸時代中期、苦難に立ち向かった七義士

寛延3（1750）年、現在の三豊・観音寺・多度津・普通寺・琴平・まんのう地域の農民によって、「西讃百姓一揆」が起りました。当時、農民たちは不作に苦しんでいたうえに、役人たちの容赦ない年貢の取り立てに不満を募らせていました。

この現状を打破しようと立ち上がったのが「七義士」と呼ばれる7人の農民です。中心人物は、笠岡村（現・豊中町笠田笠岡地区）の大西権兵衛。七義士は命を懸けて、丸亀藩と多度津藩に切なる願いを訴えました。しかし、その願いは聞き届けられず、その後、一揆首謀者の七義士と権兵衛の息子たちは全員処刑されてしまいます。自らの命を投げ打って苦難を切り開こうとした権兵衛たち。彼らの生きざまは、今もなお、地域の誇りとして、語り継がれています。

『西讃百姓一揆 — 七人童子と七人同志 —』

寛延3（1750）年の西讃百姓一揆のときに提出された十三カ条の要求や、一揆後の顛末、各地の「イキアイ（七義士が化けて出る）」伝説など、現存する当時の古文書や石碑、墓などを丹念に辿った成果がまとめられています。また、高松市下笠居地区の「埋め墓」発見の経緯、町おこしとして続いていた権兵衛芝居の歩みなども掲載。1冊1,000円（資料のDVD付）。問い合わせは千秋直康さん（☎62-3452）まで。

